

はじめに 大学応援団の在り方に関する研究会とは

現在の大学における応援団（応援組織の名称は様々あるが、本研究会では、応援を主目的とする組織を総じて「大学応援団」と呼称する。）は、応援を専門とする課外活動である。その中でも応援団全体を統率する組織を主にリーダー部などといい、一般的に大学応援団といえばリーダー部のことを指す。しかし、各大学ともリーダー部の人員は年々減少し、あるいはすでに途絶している状況にある。このままの状況が続けば、大学応援団そのものが我が国から失われる危機的状況に瀕している。

そのため、各大学の枠を越え、大学応援団経験者21大学32名を集めた、大学応援団の在り方に関する研究を行う場を特別に設け、大学応援団がどうあるべきかについて全12回にかけて議論してきた。なお、研究会においては、大学応援団の歴史がリーダー部から始まっていることから、リーダー部のことを大学応援団と呼称した。

この度、研究会における議論を以下のとおり取りまとめ、報告書を作成した。本報告書が大学応援団とはどういう存在なのかに対する答えとなるとともに、次世代を担う若者の大学応援団への入団契機となることを強く祈念している。

1 現状について

大学応援団は、日本特有の組織である。戦前から活動していたと伝えられており、日本の歴史に根ざした独特の存在ともいえる。この団体は、応援を行うことを主目的とし、大学内外で一定程度の存在感を示した時代もあった。しかし現在、わが国における大学応援団は衰退の一途を辿っている。

現在も活動している大学応援団は、全国に大よそ50超ほど存在しているが、殆どの大学応援団で所属学生の減少傾向が続いており、運動部の活動が活発な大学であっても状況に変わりはない。また、15年間で10を超える大学応援団が人数不足を理由に休団しており、現存する大学応援団の多くも所属人数の減少により、存続が危ぶまれる危機的な状況である。

大学応援団自身もこの状況に対応すべく、所作・服装・言動・指導方法を見直すなど、かつての大学応援団に見られる課題は徐々に改善されてきたものの、未だ危機的状況を脱するには至っていない。

このような状況を招いている原因については、例えば、一般的に心身とも厳しい団体であると思われる大学応援団を学生が忌避する傾向がある、社会の一部に応援の効果に対する疑義がありそのことが大学応援団の存在意義に対する疑問にもつながっているなど、様々に挙げることができるが、最大の原因は、大学応援団とは何なのか、どのような良さがあるのかについて、一般社会はもとより、大学応援団に関係する人々の中でさえ統一的な見解が見出されていない点にある。そのため、大学応援団自らの活動目的、存在意義、魅力を適切に外部に伝えることができず、若者を惹き付けられないことから、入団者が減少している。

また、所属する応援団員が減少することで、大学応援団という組織が培ってきた慣行や価値観を継承することもままならず、大学応援団そのものの衰退が加速している。

本報告書では、大学応援団の活動・目的・魅力などを、なるべく平易に紹介するとともに、今後の大学応援団の発展に向けた提言を行いたい。

2 活動について

大学応援団は組織的な応援を主活動とする団体である。主に運動部などの学内団体に対する組織的な応援活動を行う他、大学内の各種行事における活動、学外における活動などを行っている。

(1) 学内の活動について

ア 応援活動について

大学応援団は応援を活動の中心としている。我が国における大学応援団は運動部の応援を目的に誕生したという歴史的背景もあり、殆どの大学応援団が運動部に対する組織的な応援を行っている。特に硬式野球部の応援に関しては、大学応援団の今日の応援形式の多くが野球部の応援に起因しているということもあり、ほぼ全ての大学応援団が活動の中心に据えている。硬式野球部の公式試合が行われる春や秋は、その日程に合わせて活動を行っている場合が多い。

硬式野球部以外の運動部に対する応援については、各大学によって取組は様々だが、古くから大学応援団が取り組んできたものとして、相撲部の応援を挙げることができる。かつては相撲部の応援会場にて大学応援団を評価対象としたコンクールが開かれていたこともあった。また、駅伝に出場する陸上競技部に対しては、現在、多くの大学応援団が応援活動を行っている。この他、可能な範囲で多くの運動部に対する応援を行っているほか、文化部系団体に対しても応援を行うことがある。

イ 応援以外の活動について

(1) 学内の活動について

大学内の活動については、一般学生を運動部の試合会場に誘うなどの目的から運動部の応援形式を学内で披露することがあるほか、運動部に対する壮行会を行うこともある。

また、大学応援団の中で代々継承されてきた「演技」（演技については以降で具体的に説明する）と呼称される技巧（一つ一つの動作のことを「テクニク」ともいう。）を入学式、卒業式、学園祭などで披露することが多い。学内の各種団体と連携し、学内のイベントで応援形式や演技の披露を行うこともある。

さらに、各種団体の発表会における会場設営の手伝い、公的団体が実施する献血運動や募金活動への協力を行うなど、その活動は組織的な応援に留まらず、様々な活動に対する支援にまで及んでいる。

なお、大学応援団の学内での位置づけによっては、大学の正式な式典に列席することもある。特に大学応援団が学内における学生代表のような位置づけの場合、代表として挨拶を行うなど、式典における様々な役割を担うこともある。

(2) 学外の活動について

学外の活動については、大学卒業者や民間企業からのイベント出演の依頼、老人ホーム等での演技披露、地域の祭り等への協力などを行う大学応援団もある。また、大学応援団が応援形式や演技の披露を行うイベントを自ら開催することも多い。

現在の大学応援団は様々な学外団体と交流を図っており、特に大学応援団同士の交流は継続的に行われている。戦後、多くの大学で応援団が結成されたが、運動部の試合会場で応援団員同士のトラブルも多かった。また、各大学応援団は継続的な交流を望む気運もあった。そのため、各大学の協調を図ることを目的とした連盟組織が各地で作られるようになった。こういった連盟内での各大学間の交流は盛んであり、応援形式や演技を披露する場を設ける他、共同して対外的なイベントに協力する機会が多い。さらに、連盟といった枠組みだけではなく、特定の大学間での人的な交流も行われている。

3 目的について

大学応援団の活動は、大学における応援団という立場から、大学全体を盛り上げ、大学の名声を高めることを第一義的な目的としている。その手段として応援があり、演技がある。そして、活動を通じて所属する

応援団員を成長させるという第二義的な目的も有している。これらをまとめると以下のとおりとなる。

- ①スポーツの応援等や地域貢献を通じて大学全体を盛り上げる
- ②高等教育機関たる大学の学生に相応しい活動にまい進することで大学そのものの名声を高める
- ③活動を通じて社会に貢献できる人材を育成する

まず、①については、個人ではなく組織として様々な応援や地域貢献を行うことで、大学全体が活性化されることを目的としている。例えば効果的な応援活動を行うことで応援対象となる学生などは勿論、観客として来場している学生やOB・OG、大学関係者などの気持ちを高めることができる。また、地域貢献として献血や募金、清掃などの活動への協力、地域の商店会のイベントへの協力などにより大学の名前を広めることで、学生の母校愛を高めるとともに、大学の発展に繋がる。このため、大学応援団は閉鎖的に活動するのではなく、積極的に外部と交流していくことが望まれる。この目的は、他者の活躍により間接的に達成することから、大学応援団は他の様々な課外活動と異なり、利他的な活動に重きを置いた性格をもつ団体であるといえる。

②については、高等教育機関である大学の応援らしい格調高い応援や演技の披露、自律的な判断に基づく適切な活動などにまい進することで、大学応援団のみならず大学そのものの名声を高めることを目的としている。大学応援団は特定の団体に限らず大学それ自体を応援する団体であり、応援するという分野において学生の中心的立場であることから鑑みれば、大学の名前に恥じない姿で運営されていることが望まれている。また、このような団体が活動していることが、大学に所属する現役学生の母校に対する誇りの醸成に繋がることを望ましい。このため、大学応援団は、後ろ指を指されるような応援、演技の披露、行動などを行わないよう十分に留意しなければならない。そして、応援団員個人には、日常においてもそのことを念頭にした行動が求められている。

③については、前述した①②の活動を行う中で、応援団員の身体や精神を鍛えるとともに、学内外の活動において様々な経験をしていくことで成長を促し、社会に貢献できる人材とすることを目的としている。特に、応援する者は応援される者より努力するべきである、といった考えが多くの大学応援団の中に広がっており、この考えに基づく心身鍛錬により、応援団員は日々成長していく。また、応援団員は各学年によって担う役割が異なり、1年生は指示に従い迅速に行動する、上級生は下級生を指揮しながら円滑に実務を遂行する、4年生は団体の責任者として組織運営に必要な計画立案・関係者との調整等の中で指導力を発揮するなど、学年別に成長を促す機能を有している。社会に貢献できる人材の育成は大学応援団の第二義的な目的ではあるが、第一次的な目的の結果としてもたらされる成果であり、人材の育成こそ、大学応援団における最終的な目的ともいえる。

すなわち、大学応援団という組織は、応援という手法を用い様々な人々に影響を与えながら、所属する応援団員の成長を促していくことを目的とする団体であると定義することができる。

4 具体像について

(1) 大学応援団の位置づけについて

大学応援団の学内での位置づけについては、大学によって千差万別である。

他の運動部と同様に体育会に所属し、活動を行う団体が最も多い。その場合、運動部の応援が活動の中心となる。体育会に所属しつつも大学から旗を預かり管理するなど、特別な役割を与えられた団体もある。また、体育会に属さず、独立して活動を行う団体もある。

さらに、学内の自治組織の一つ、または大学直属の組織として活動する団体もある。このような団体は、大学の公式な式典への参列など、応援以外の活動を行っている場合が多い。また、スポーツ応援以外にも、各種の応援活動を行っている。

大学応援団の活動費は、それぞれの団体が属する大学により千差万別であり、大学や学生自治組織から直接配布される事例、体育会から配布される事例、大学応援団OBから構成されたOB会から援助される事例などが多い。なお、外部から活動費を配布・援助されない団体もあるが、それぞれ自身の許す予算の範囲内で活動に邁進している。

これらの違いは過去に大学応援団を運営していた先達の取組結果であることが多い。いずれにしても大学によって大学応援団の活動や目的に大きな違いがあるわけではない。

(2) 応援について

応援の形式については、大きく分けて、観客をリードし会場一体となった応援を目指す形式と、大学応援団が主体となり大学応援団単独かそれに近い形での応援を目指す形式がある。かつて学生スポーツが盛んであった頃は、運動部の試合に観戦に来た学生や一般人の声援をまとめ会場一体となった応援を行うよう、観客に手拍子を求める、声だしをお願いするなど、観客をリードすることが多かった。現在でも硬式野球部の試合における応援では、観戦に来た観客をリードする応援を行うことが多い。他方、学生スポーツにおいて観客が減少したことで、観客をリードする形式ではなく、大学応援団単独での応援を行うことも多くなっている。

大学応援団の応援方法で最もシンプルな形態は、洋太鼓を用い一定の拍子で音頭を取り、それに合わせ応援団員が拍手するものである。また、会場を盛り上げるために楽器による演奏を取り入れる応援も主流となっている。しかし、全国的に応援形式は統一されていない。また、運動部の試合のルールや会場の使用制限などにより太鼓や楽器を使用することができず声のみの応援となることもある。

硬式野球部に向けた応援については、大学応援団の発生が野球部の応援からと言われているほど古くから行われており、全国的にも暗黙的に一定のルールが定まっているが、他の応援については、試合会場における制約に従いながら個別に決めていることが多い。しかしそういった制約下においても、統制が保たれた応援を行うよう、大学応援団同士で事前に十分打ち合わせるとともに、競技ルールに従った進行を行うことが基本である。

応援は当然のことながら試合を行う運動部や選手らを鼓舞するものでなければならない。このため、運動部等が恥とを感じるような乱れた応援、稚拙な動き、失笑を買うような行動は厳に慎んでいるし、慎むべきである。また、観客をまとめ上げ一体感ある応援を指揮するよう、試合展開、会場の雰囲気を読み、効果的かつ臨機応変な応援を行うべきである。いずれにしても応援はあくまで応援対象となる人や団体が主役であることから、彼らを奮起させる形の応援を実施することが求められる。

(3) 演技について

大学応援団では「演技」と呼称される技巧が代々継承されている。これは、大学応援団それぞれに伝わる特殊な技術のことであり、各大学に伝わる歌唱や、広く一般に歌われる歌に、独自の振付が付されたものなどである。演技の形は機能的な意味があって定められている場合が多い。例えばリーダー（応援団を含め応援する人々の前面にて応援全体を統率する者）の動きの中には、二拍子と四拍子の指揮を表し、観客がリーダーの動きに合わせて声援を送ることができるよう、動作を大きくした技巧（テクニック）が見うけられる。

演技は各大学応援団を特徴付けるものであり、それぞれの演技は世代を超え、丁寧に継承されている。ま

た、大学応援団の中には、新しい演技を創造する団体もある。いずれにしても大学応援団における演技は、ただ単純に踊ることを目的に創作されるものではない。

ア 「型」について

日本文化は「型」の文化ともいわれているが、技能を中核とした日本文化は「型」の修練を通じて次の世代に伝承されており、「型」によって先人の培った技術が現代まで伝えられていることが明らかにされている。また、ある研究では、古来より日本人は、技の習熟と人格の向上が対応するものととらえてきたことを指摘している。大学応援団における「型」は、応援技術を応用・圧縮した「演技」のことといえ、応援団員は、「型」の練習を繰り返し行い、反省と反証の中で自己を見つめ改善を図っていくことで、心身の一層の向上に努めている。

同じく研究によれば、武道などの技芸では、技を実践していく経過の中で、運動が美的規範によって拘束される、とされている。これは日本人独特の美意識から来るもので、技が習熟すれば無駄な力や動きがなくなり、すっきりとした運動になって表れるという運動の簡略化につながるということだが、大学応援団の演技も美的規範の範疇にあり、完成度が高い演技は「色、艶」といった美しさを兼ね備えた高い芸術性を有するものとなっている。

イ 構成について

演技は、「リーダー」などと呼ばれる全体を統率する者と、「バック」「ビョウブ」「受け」「客前」「サブリーダー」「列員」「中間リーダー」（以下、本報告書では「バックなど」とする。）などと呼ばれるリーダーの指揮のもとで動作を取る者で構成される。基本的にはリーダーが観客の前面に立ち、観客から見てリーダーの背後にバックなどが整列する。リーダーとバックなどの振付は異なるものが多い。

各大学応援団で多くの演技を所有しているが、いずれの演技もその曲構成については、応援団員の声によるものの他に、太鼓で調子を整えるものが殆どである。また、吹奏楽による演奏を付ける場合もある。さらに、拍手のみで構成された演技も存在する。

演技の中には、演技を効果的なものにせしめるため、扇子などの小道具を使用することがある。これにより演技に対する衆人の目は一層集められるが、その使用は演技の魅力を損なわないよう最小限のものとなっている。

演技は各大学応援団のアイデンティティを確立する極めて個別性の高いものである。バックなどの技術は1年生の段階から習得していくものだが、リーダーの技術は特に重要視されており、特定の学年、特定の応援団員しか習得することを許されないものもある。

各大学応援団によって演技の構成は異なっているが、それぞれにモチーフとなった動作やイメージがある。その中には代々継承される途中で、各時代の応援団員により動きが洗練され、モチーフの原型を留めていない演技もある。しかし、モチーフそれ自体を無為に残していくことが大切なのではなく、演技を継承していく過程で、演技の成り立ちを理解しながらその技術を昇華していくことが重要である。

ウ 継承について

演技は大学応援団を特徴付ける重要な技巧であり、代々継承すべきではあるが、当代の学生が引き継いでいく生きた技術であり、それを究める過程の結果、さらに優れた技法に昇華していくことは認められてきた。そしてその中で、より芸術性の高い技術が見いだされてきたのである。また、技術を昇華する過程においては、団体内部における創意工夫・試行錯誤は勿論だが、技術の向上は競い合うことでより優れたものとなることから、大学応援団相互で競い、技術を高め合うことも必要な視点である。

(4) 演技の披露について

大学応援団では、演技を外部に披露する機会を「リーダー公開」「ステージ」「演技発表」「デモンストラーション」など（以下、本報告書では「リーダー公開など」とする。）と呼称している。大学内の各種行事における活動、学外における活動などで行うことが多い。リーダー公開などにおいては、その舞台や進行、演技の発表順、所作のタイミングに至るまで細かく計画されたものである。それらを滞りなく正確に行うことは大学応援団にとって極めて重要なことである。

リーダー公開などで演技を公表する理由の一つは、応援団員の日頃の鍛錬を披露する場を設けることで、応援団員の技術力を向上させるとともに、演技そのものの技術を昇華させることにある。観客の多寡に関わらずリーダー公開などで演技を披露することで、応援団員が自らの技術を高める動機が生まれ、ひいては大学応援団全体の技術力を向上させることができる。応援団員はこの場で自己の鍛錬全てを表現することとなるため、リーダー公開などに焦点をあて、技術の向上に励んでいる場合が多い。

また、応援等では普段あまり使用されることのない演技をリーダー公開などの場で披露することで、一般人や大学応援団相互間に、当該演技、ひいては当該応援団そのものへの理解を深める機能も有している。時に芸術性を有するほどの演技を目にすることで、そこに至った歴史、代々継承してきた先人の工夫、現役世代の修練などを広く観衆に感じてもらうことも、大学応援団の魅力を示す重要な機会となっている。

大学応援団が特に重要視するリーダー公開などだが、それは静謐な舞台で演技を行うことで自己と向き合い、自己の持つ技術を最大限引き出す舞台となるものである。この場における極度の集中が、新たな自己の獲得へと応援団員を導く。演技の披露などのための高度な集中が、心理学で「フロー」と呼ばれる状態を作り出すこともあり、その技術の獲得は大変魅力的なものである。フローとは、全人格的に行為に没入している時に人が感じる包括的感覚のことをいい、端的に言えば高度に集中している段階にあることを指している。また、さらに時間の経過を忘れるほど極度の集中状態においては、本来以上の高パフォーマンスを発揮することもあるとされている。日本の剣道、弓道、能を始めとする武道・芸道の境地は「無我」や「無心」といわれ、これらは高いレベルのフロー状態であるとの指摘もあるが、演技を究めていくことでそれら日本の伝統的身体技法におけるフロー状態と同じく、心身が一致した、運動そのものになりきった状態となることがある。自己と向き合い集中して技術を高めていくことが高パフォーマンスを生むことから、応援団員は日々、鍛錬を積み、披露の舞台に備えている。

(5) 練習について

大学応援団では、個人がそれぞれ自主的な練習を行うほか、所属する応援団員が集まり、全員揃っての練習を行っている。大学応援団にとって練習は、応援活動やリーダー公開などに向けた鍛錬の時間として大切であるが、単に技術の向上に留まらない意義を持つ。

練習では、団体として活動を展開するに際し必要な拍手や発声、演技の動き等を反復して練習する他、体力を向上させるトレーニングが行われる。技術力の効率的な向上を目指し、かつて行われたような非科学的な練習は少なく、あくまで団体の活動を展開するに際して必要な技術を養うための時間として使用されるようになっている。仮にそのような練習を行っていない団体は効率的な練習の実施を目指すべきである。

他方、応援団の練習のうちの一部には、一見合理性を欠いた練習、例えば技術や体力の向上を目指しているとは思えない特異な練習が存在することも事実である。これらは一見して合理性がなく、廃止されるべきという向きがあるかもしれない。

しかし、大学応援団は単に応援活動を展開する組織ではなく、応援活動を含めた活動全てに継承されるべ

き慣行や価値観がある。そして、このような慣行や価値観を内包する大学応援団特有の世界観を適切に継承するためには、新たな応援団員を仲間に迎え入れるとともに、同質性を形成する機会を設ける必要がある。つまり、この世界に応援団員を迎え入れるための通過儀礼的な行為として、一見非合理といえるような練習も存在している。応援団員が通過儀礼的な行為を乗り越えた時、応援団員として新たな身体や精神を得ることができるとともに、大学応援団の慣行や価値観を継承する応援団員と認められる。

勿論、理不尽なしごきや暴力などの体罰、虐めは徹底的に排する必要がある。これら非人間的行為と通過儀礼的行為との線引きは、練習を受ける本人を成長させるものであることを自他ともに認識しているかどうかで明確に区別することができる。大学応援団に関係する者は、練習が応援団員の心身の健全な発達を促すとともに、活動を通じて達成感や連帯を育むものとするよう、総合的に考え適切に実施しなければならない。なお、体罰経験が体罰を再生産する可能性があることに留意する必要がある。

(6) 押忍について

今日も多く大学の応援団で使用されている言葉に「押忍」があるが、大学応援団に伝わる通説では、その源流を江戸時代の佐賀鍋島藩に伝わる山本常朝の「葉隠」に求めている。葉隠に起因する押忍が江田島兵学校の学生たちに伝わり、さらに運動部や大学応援団に広まったとする説である。押忍の起源はこの他にもいくつかあるが、少なくとも大学応援団では、厳しい労苦に耐え忍ぶだけでなく、より積極的に努力する姿を具現化するという意味や、相手を立てるとする趣旨の「押」と謙虚な自分を示す「忍」を併せ持つという意味などと受け止められており、今日でも広く使用されている。

押忍は、挨拶や相づちとして使用する大学応援団が多く、特に上級生などの目上の者に対する下級生の挨拶や相づちとして用いられる。押忍は精神性を表す言葉であり、前述のように鍛錬を積む者を具現化する言葉であることから、意思表示全てに常用するのではなく、言葉の意味を理解し適切に使用する~~。~~ことが大切である。

いずれにしても大学応援団の精神を表す重要なキーワードの一つといえる。

(7) 服装について

大学応援団の通常の活動における服装は、学生服（学ランともいう）が一般的であるが、全ての大学応援団に共通しているわけではない。例えば学生服ではなく、動きやすさからトレーナーを導入する大学応援団も存在する。

大学応援団に所属する応援団員が学生服を着用する理由は、かつて大学における男子学生の標準的な服装が学生服だったからである。戦前から戦後直後までは、大学応援団に限らず一般的な男子学生は学生服を着用していた。一般学生をリードして母校を応援する応援団員にとっては、学生服の着用は当然であった。現在、大学応援団といえば学生服が連想されるほど、大学応援団と学生服のイメージは一体的となっているが、それは大学における私服の一般化が進んだ中であっても、大学応援団が男子学生の標準服である学生服を大切に守り続けてきた結果といえる。

学生服そのものは明治期（1890年代前後）に導入されたものであり、応援団員も他の学生と同じように学生服を着用していた。戦後に各大学で応援団が再興された中でも、大学応援団は学生服を正式な服装とした。

1960年代には、裾が大きく広がったズボンや、いわゆる「長ラン」と呼ばれる裾の長い上着が生れるなど、社会の嗜好の変化の中で学生服の改変（改変された学生服は「変形学生服」と呼ばれている。）が行われるようになった一方、大学生活においては日常的には学生服を着用する習慣がなくなっていった。

大学応援団では学生服そのものは正装として着用され続けていたが、1960年代頃から社会における学生服の改変と前後するように、変形学生服を着用するようになった。ただし、大学応援団が変形学生服を導入した背景には、①襟を高くし俯きにくくするため、②裾を長くし尻を見せる失礼がないようにするため、③ズボンの裾を大きくし激しく動いても服が破れないようにするため、などそれぞれに理由がある。

学生服の改変については、機能性の面から導入されてきたため、機能性に関係しないような過度な改変は行わないよう多くの大学応援団で留意されている。

(8) 上下関係について

大学応援団の特徴として、上下関係を非常に重んじていることは、広く一般にも認知されている。上級生になるに従って重きを置かれ、下級生から尊重される。その中で最上級生である四年生は「幹部」と呼ばれ、幹部の中でも各幹部を統率する団長(各大学により「主将」「代表」など、大学応援団を代表する者の名称は異なる。以下、「団長」と呼称する。)は、神格視さえされることがある。団長は団体の長として自覚を持ち、常に人の模範たる姿勢と組織を運営する確固たる信念が必要となる。また、大学応援団は組織として活動する以上、人と人との関係性を礎とし、上下関係の中にも信頼感が醸成されるべきである。上級生は尊重されるに足る身体・精神を身に付けなければならない。

大学応援団において上下関係が重んじられる理由は大きく以下の三点である。

第一に、応援活動を適切に行うことに起因するものである。応援活動に臨んでは、試合展開、会場の雰囲気を読み、効果的かつ臨機応変な対応が必要である以上、明確な指揮命令システムが存在しなければならない。時には応援の失態により大学の名声を汚す危険性がある以上、最上級生、特に団長に統率の責任を集中させることで、一丸となった応援を遂行することができるようになる。

第二に、安定的な団体活動を行うための機能に起因するものである。大学応援団では各幹部や学年ごとにそれぞれの役割(権限・責任・義務)が明確化されているが、これは所属する人の上下ではなく、機能の軽重を明確化するためである。このことが、組織運営上の混乱を防ぎ、安定的な団体活動を営む重要な要素となっている。その中で、団長などの組織の最高責任者が羅針盤として適切な判断を行うとともに、各団員が役割を果たすことで、組織一丸となって活動することができるようになる。

第三に、大学応援団という組織の記憶を次世代に継承する機能に起因するものである。大学応援団は過去を引き継ぎ次世代に残していく中で独自性が育まれてきた。過去を次世代に引き継ぐ手段として、上下関係の中で活動内容などを安易に変化させず、実体験の中で正確に引き継いでいくことで、組織の記憶を次世代に継承することができるようになる。

このような背景から上下関係が作られ維持されてきたが、過去にはその運用が過度になり過ぎることもあったため、今日では権限の明確化など様々な仕組みにより、その運用の適正化を図っている。今後、社会が変化する中で時代にあった運用が行われる必要があるが、大切なことは、上下関係が維持されている背景を踏まえ、時々の最上級生らが適正な団体運営を行うことである。

(9) 団旗について

大学応援団を象徴するものの一つに「団旗」を挙げることができる。団旗は通常の旗と異なり、非常に大きな^{あつら}誂えとなっている。これは試合会場などで選手らに母校の応援団の存在と位置を表すことを目的としている。また、大学によっては、団所有の旗ではなく、大学から校旗(「学旗」という大学も存在する。以下、本報告書では「校旗」とする。)を貸与されているという形式をとっている場合もある。選手らは、はたらく母校の団旗の下に自分を応援している仲間がいることを遠くからでも知ることができる。

団旗は、大学応援団の意思を表現する機能も有する。例えば、大学応援団間で互いの健闘を称えエールを交換し合う際は、団旗を下げるなどにより団体全体の敬意を表している。また、母校の校歌など重要な歌を歌いあげる際も、団旗を下げるなどによりその歌に対する団体の考えを表している。さらに、葬儀などで団旗を掲揚する際に、半旗とすることにより弔意を表することもある。

団旗は、大学応援団にとってその団体の存在と意思を示すものであることから非常に重要視されている。取り扱う際には白手袋をする、掲げない場合は警護の応援団員を配置するなど、時に神聖視されるほどである。応援団員にとって、団旗を掲揚する旗手に選出されることは名誉なこととされている。

代々の応援団員によって大切に保持されてきた団旗は、団体を象徴するものの一つとして大学応援団の内部で大切に引き継がれている。

5 成り立ちについて

大学応援団の成立については複数の説がある。明治23年4月13日に隅田川で開催された旧制第一高等学校（現東京大学教養学部。以下「旧制一高」という。）と東京高等商業学校（現一橋大学）とのボートレースで応援歌を斉唱するなど組織的な応援を行ったことを起源とする説や、明治30年前後に旧制一高と旧制第三高等学校の間で開催されていた野球の定期戦から組織的な応援が始まったとする説、明治36年に旧制一高が横浜の外人クラブと横浜公園で開催した野球の試合で、旧制一高の生徒が東海道線の汽車の中で応援を行ったことが記録上の組織応援の始まりとする説など、その説は一つではない。

また、明治36年には野球の早慶戦が始まり、観客に拍手をさせるなどの組織的な応援を行ったようである。早くもこの頃には、今日の大学応援団で一般的となった「エール」や「リーダー」という言葉が発生したとも伝わっている。早慶戦を中心とする野球の応援から様々な応援手法が考案され、取捨選択の中で大学応援団の応援形式が固定化されていった。

また、庶民の娯楽が少ない中、野球の観戦は過熱化する一方だったようで、明治39年には、前述の早慶戦が観客の騒乱により中止になるなど、今日では考えられない過激な状況だった。大学応援団が内外で争いを起こすことも多く、社会問題化することもあった。

その後の第二次世界大戦の混乱により、戦前存在した大学応援団の多くは一旦解散し、戦後に復興した。復興に際しては、終戦直後に復員した学生もいたようで、軍隊式の厳しい練習も課されていた。また、戦後初期の大学応援団には、応援団専属で活動していた学生のほか、他の部を兼ねて応援団に所属し活動していた学生もいた。学生スポーツ、特に野球の人气が大変高い時代だった一方、戦後直後の殺伐とした時代でもあり、大学応援団は選手に向けた純粋な応援を行うとともに、野球場や学内の安全確保を担っていったことが伝えられている。

戦後しばらくして学内に学生が戻ってくると、戦前に応援団が存在しなかった多くの大学でも応援団が作られるようになった。各大学により応援団結成の過程は若干異なるが、創団の目的として、学内を元気づけるため、学生スポーツの隆盛に伴う応援の統制のため、という理由が多いようようだ。特に昭和20年代に創団した大学応援団は非常に多かったようで、関東地方では2つの大きな学生応援団連盟が発足した。昭和30年代までは所属する応援団員の人数も多かったと伝えられている。

現在に伝わる応援形式の多くはこの頃整備された。指揮者の下、応援団員が一斉に拍手等を行ったり、指

揮者が独特の振付で応援全体をリードしたりといった今日の大学応援団の応援で当たり前の行動は、この頃から各大学応援団に取り入れられた。さらに、今では当たり前となった吹奏楽を取り入れた応援も、この頃、各大学応援団に導入された。明治後半から戦前が大学応援団の黎明期とすれば、戦後から昭和30年代までは、まさに大学応援団の成長期といえる。

他方、この頃の大学応援団の振る舞いに対し、社会一般から厳しい目が注がれるようになった。特に昭和50年代までは大学応援団自体が社会を騒がせる事件も度々発生しており、その荒々しさが今日の一般社会にまで残る大学応援団への負の認識につながっている。

昭和の終わりから平成の時代に入ると、各大学応援団に所属する応援団員は急激に減少していった。この背景には大学生の運動部離れもあるが、当時の最も大きな原因は、大学応援団が旧態依然とした体質を保持し、厳しい指導、時には暴力も辞さないような指導が行われていたことにあった。このような状況は大学応援団存続における重大な問題であることは大学応援団の多くも気づいており、近年では暴力的な指導や連帯責任といった仕組みを改めるなど、内部の改革に取り組む団体は多い。

大学応援団を取り巻く状況は依然として厳しいままであるが、高校における応援団は徐々に勢いを取り戻しつつあり、高校生活で部活動として応援団に所属した学生が、大学に入学後、休部中の応援団を再興する事例も増えてきている。高校応援団と大学応援団では取り巻く環境や活動内容に若干の差異はあるものの、大学応援団の世界に果敢に飛び込み新たな風を吹き込む学生の姿は、大学応援団にとって大変頼もしい。今後、高校応援団と大学応援団の関係が深まることで、日本の学生応援団全体への好影響に繋がっていくことが望ましい。

6 魅力について

様々な活動を行う大学応援団は、非常に奥深い魅力を有している。大学応援団の魅力は、入団し身をもって体験しなければ伝わりにくいものであり、これまで必ずしも広く知られているとは言い難かったため、本報告書でその魅力を明らかにする。

各大学応援団の置かれた環境により若干の差異はあるものの、その魅力は大まかに以下のとおり、

- ①応援を取り仕切る者として一体感ある応援を作るとともに、間近で感動を共有できること
- ②応援活動を通じて多くの人と繋がりが持てること
- ③大学の歴史と伝統に触れ、それを守ること
- ④身体・精神を鍛える中で、自らの成長を感じられること
- ⑤実学を学ぶ機会を得ること

である。

①については、応援において応援席をまとめ上げ一体感ある応援をプロデュースできることが大学応援団の魅力であり醍醐味である。応援席を一体化させることができるのは、応援席を任せられた大学応援団のみであり、その役割を果たすことができるかは応援団員の手腕にかかっている。これを適切に実施できた時の感動は得難いものである。

また、応援の役割を担う団体として選手に寄りそう側の立場から、試合に立ち会う機会を得ることも魅力である。一観客の立場ではなく、ある部分では選手の背後から選手側の目線で試合に関わることになり、応援対象の選手や組織との一体感を感じることができる。このことは、選手との感動の共有を体験できる貴重な機会ともいえる。

②については、大学応援団は関係する個人、組織とも幅広く、多くの人々と応援を通じ繋がることのできる魅力である。大学応援団は他の運動部などと異なり、大学という大きな組織の中で横断的に交友関係を構築することができる。これは、学内において競い合うライバルではなく、同じ方向を向く学友という仲間意識から繋がる輪であり、大学応援団特有の魅力といえる。

また、大学応援団は運動部の応援以外の活動も多く行っており、その過程で様々な人と出会い、関係性を築くこととなる。例えば様々な依頼や、応援中の出会い、他の大学との交流から生まれた繋がりなどである。それは人脈として自己の大きな財産となっていくものであり、それを得ることができるのも大学応援団の魅力といえる。

③については、大学応援団に所属することで、大学応援団の伝統は勿論、設立の趣旨を含めた大学そのものの歴史や伝統を学ぶとともに、応援活動などを通じてそれを自分自身で表現できることの魅力である。各大学にはそれぞれ伝統的に継承されてきた文化が存在していたが、今日では入学者の増加と均質的な講義、寮の廃止、学生の部活動・サークル活動離れなど様々な理由により継承されにくくなっている。今日では母校の校歌を知らず、母校特有の行事に参加することもなく卒業していく学生も多いが、それは母校の文化に触れる機会が得られないために起こることであり、母校を知る機会を損失しているともいえる。大学応援団はそういった母校の文化を、継承された演技や日常の活動の中にタイムカプセルのように継承しており、大学応援団に所属していることで大学の培ってきた伝統に触れることができる。伝統的な部活動が徐々に失われていく現代において、大学応援団の大きな魅力となっている。

④については、応援に必要な技術や体力、精神力を高めていく過程で自らの成長を感じられることの魅力である。大学応援団は応援の専門集団として応援に関する技術を磨く必要がある。このことを達成するために自らの技術や長時間の応援に耐えうる体力や精神力を高めるべく繰り返し練習に励むわけだが、その過程で自らの身体的・精神的な成長をはっきりと実感することができる。

また、応援を行っていく中で応援対象の求めるニーズに向き合い、適切な応援を行うための試行錯誤を行うことになるが、それは様々な気付きを与えてくれる。このことがより良い応援を作ることに繋がるとともに、他人のために考える精神を養う契機となる。このような自己を変容する機会があることも大学応援団の魅力となっている。

⑤については、大学応援団において応援団員に教えている各種礼法、所作、言動、文章の書き方、企画の立案・進行など、社会で活用できる実学としての知識を早期に身に付けることができる魅力である。大学応援団は応援その他の活動のため学内外の多くの人々と折衝するが、折衝においては団体の代表として対応していくことになるため、社会一般で使用されている正しい礼法、所作、言動が必要となるとともに、時に文書でのやり取りも求められる。また、大学応援団が主催・共催・出演する企画においても、適切な立案・進行が必要となる。そのため、大学応援団では上級生から下級生に対し、礼法等に関する実学としての知識が組織的に教えられている。このような有益な知識を、大学応援団の活動を続ける中で自然と学ぶことができることも大学応援団の魅力となっている。

これらは四年間かけて応援団に所属することで全てを経験できるものであり、大学応援団が学生に提供できる魅力である。これらの魅力は、大学応援団に少し足を踏み入れるだけであってもその一端を体験することができることから、学生にはぜひ門戸を叩いてほしいと願う。また、大学応援団においては、学生が門戸を叩きやすい環境を整備することが望まれる。

7 組織風土について

組織風土とは、表面化した組織の価値観のことである。大学応援団の組織風土を端的に表すものとして、団訓がある。大学によって様々な団訓が設けられているが、共通するものとして「質実剛健」など心身鍛錬を促進するもの、「団結」など組織の結束を促すもの、「華麗」など形式美を追求するもの、「礼儀」など人間性を高めることを目指すものなどがある。これらはその団体の組織全体に存在する価値観を表すものでもあり、各大学応援団が団訓に掲げた標語は、それぞれの団体のカラーを示している。また、団訓として明文化されることで、さらにその組織の方向性を明確化し、より理想とする組織風土を形成することにも繋がる場合がある。

団訓は組織風土を文字で端的に表しているものといえるが、この他に大学応援団の組織風土を培っているものとして「上下関係」がある。前述のとおり、上下関係の中で適切な応援や安定的な団体活動等に努めているが、これが整然とした雰囲気や規律を作り出しており、大学応援団における組織風土の基礎となっている。

団体が継続していくことで培われる組織風土もある。大学応援団はその成立より母校と組織の伝統をタイムカプセルのように継承している。また、組織の伝統を継承する中で、時代時代の雰囲気も微かに引き継いでいる。伝統的な部活動が徐々に失われていく現代において、母校や組織の伝統を継承していくという意味それ自体が、大学応援団の組織風土を培っている。

他方、現在の大学応援団に共通する組織風土に対する一般社会の認識には大きな誤認があると考えられる。一般的に「礼儀正しい」「勇ましく格好良い」「伝統を守っている」などの良い認識もあるが、「暴力的」「古い」「伝統に固執している」といった負の認識もある。

負の認識については、それらはかつて存在した大学応援団の姿の残滓であるが、今日の大学応援団では、今にそぐわない行動や非常識な所作を検証し、良いものは残し、悪しきものは改めるといった作業を行っている。負の認識の根源は、大学応援団という組織が戦前戦後の激動期を経ながら今日まで存続してきたことに由来している。

戦後、大学応援団が復興されるに際し、軍などから復員した学生が軍隊式の練習や気風を持ち込んだことや、戦後直後には社会全般に殺伐とした雰囲気があり、大学応援団も社会的背景の影響を強く受けた。こうした背景の中で運動部の応援を行う大学応援団は、応援団自体が他校に負けてはならないという意識もあり、厳しいことが強いこと、軟弱では周囲に示しがつかないという気概から、徐々に過剰な練習や運営につながっていった。このことが「暴力的」という印象を与えるようになったと考えられる。

また、現在の大学応援団が歌う歌の中に軍歌などの古い歌があることから誤解されることもあるが、大学応援団では、例えばダンチョネ節やノーエ節などの民謡や、大学かぞえうたなど当時流行した歌の歌詞を替え振付を考案し、応援歌として使用する事例が多い。大学応援団として学生を盛り上げるために、当時の一般学生が良く知る歌を応援歌として使用することが多かったことがその理由である。

さらに、大学応援団には多くの決まり事があり、それを守ることが「伝統に固執している」といわれることもある。例えば大学応援団では、交流がある団体への挨拶状・礼状の送付、献酒等の贈答品のやり取り、礼節に厳しいなど、現在では他にあまり見られない「習わし」がある。それらはかつて日本で一般的に見られた「日本人の習わし」が今日の大学応援団に残ったものである。運動部と異なり、大学応援団においては

競技成績を求め合理的な判断を求められることはなかった。そのため、活動そのものの変容を求められることはなく、活動内容それ自体を見直す理由が見当たらず、古い時代の日本人の習わしを保持しているものと考えられる。

このような背景から大学応援団の組織風土が形成されてきたが、今日に残る大学応援団では、現代にそぐわない行動や非常識な所作を検証し、良いものは残し、悪しきものは改めるといった作業を行っている。即ち、大学応援団は、かつての日本の姿の残滓を残しつつも、今日の時代に合った団体であろうとしている。重要なことは、大学応援団自身が過去を鵜呑みにして全てを受け入れるのではなく、何を守るべきか、何を改めるべきかを検証し取捨選択していくことである。

8 応援団員のスピリットについて

大学応援団が日本のかつての文化を今日においても保持していることは既に記述したとおりである。このことは所属する応援団員のスピリット（精神）にも大きく影響しており、今日の大学応援団においてもなお引き継がれている。また、応援団員らしさとは、「質実剛健な印象」「自信に裏打ちされた堂々たる風格」「人を惹きつける魅力ある人間性」といえるが、このような応援団員らしさは応援団員として活動する中で培ったスピリットが外面に表れたものであり、大学応援団に所属する応援団員は、身体的な努力とともに、大学応援団の応援団員に相応しいスピリットを身に付けることが望まれる。

応援団員らしさの源泉となるスピリットとは何かといえ、端的に「いき」「おとこ気」「奉仕の精神」などといった言葉で表すことができる。

「いき」とは、ブリタニカ国際大百科事典小項目辞典によれば、日本で、特に江戸時代にいたって意識され始めた美意識といわれている。江戸時代は様々な遊芸が未曾有の大盛況となりその影響は庶民へと拡大していった。その中で生まれた独自の美意識が「いき」である。「いき」は内面的には心意気の潔さをいい、転じて身なりなど外見がさっぱりと洗練されていることもいうとされている。「いき」について研究した九鬼周造は『「いき」の構造』において、その定義を「垢抜けして、張りのある、色っぽさ」、言い換えれば「色っぽさ（^{びたい}媚態）」「^{いきじ}意気地」「^{ていねん}諦念（あきらめ）」にあるとしている。

大学応援団の、特に下級生においては、それまで経験のない様々なことを早々に学ぶことが求められる。そのような状況下においては、ある種の^{こたわ}諦念のもと、拘りを捨て、教えられたことを実直に行い、誤りは素直に反省し、次に生かすことが成長への近道である。このようにして成長した下級生は、自信に裏打ちされた確固たる芯を持つことで^い意気地のある強い人となり、深みある人間性を獲得していく。そして、そのような深みのある人は、人間的な^い色っぽさをまとい、周囲を惹きつける存在となっていく。このような人を一言で表せば「いき」ということができる。日本のかつての文化が残る大学応援団において、戦後まで一般庶民感覚に残っていた「いき」を良しとするスピリットは、今日の大学応援団になお息づいている。

また、大学応援団が成立した背景に、学内の安全確保があったことは既に述べたが、この目的を達成するため、意欲ある人間が集まることで大学応援団が組織化された。彼らの精神には、困っている友がいれば助けなければならないという気質があり、古くは学外の暴力から学生を守り、新しくは学内における献血や清掃などの活動に繋がっている。この行動は「おとこ気」という言葉で表すことができる。

さらに、大学応援団の目的の一つである「スポーツの応援等や地域貢献を通じて大学を盛り上げる」から、大学応援団は、利他主義に重きを置いた性格をもつ団体であることは既に述べた。大学応援団では、あくまで応援する対象あつての自らである、という意識が存在している。このような精神は、例えば災害発生時に

において他人のために行動する人が多いという日本人らしさに直結するものであり、「奉仕の精神」と表すことができる。

応援団員のスピリットを一言で表すことは困難だが、「いき」「おとこ気」「奉仕の精神」などを胸に秘め、確固たる信念を持ち、揺らぐことなく活動に邁進するのが応援団員といえる。具体的には、努力に裏打ちされた自信を抱きつつ、それを殊更^{ことさら}に晒すことを避け、応援という舞台に邁進する佇まいこそ、大学応援団に所属する応援団員の美意識であり、生き様である。そしてそのスピリットが、さわやかで洗練された服装や髪型、言葉遣い、立ち振る舞いなど自然な洒脱^{しゃだつ}さと紳士的な言動となって表れてくる。このような応援団員に対し、多くの人が応援団員らしさを感じる。

9 大学応援団という「文化」について

以上のとおり、大学応援団の姿を明らかにしてきた。いずれの大学応援団も大よそ類似した活動を続けてきており、その組織に共有される価値観を形成している。この価値観は、大学応援団以外の組織にはない、特有の「文化」を形成していることを表明したい。

文化についての決定的な定義はないといわれるが、大辞林によれば文化とは「学問・芸術・宗教・道徳など、主として精神的活動から生み出されたもの」とされており、大辞泉によれば「人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体」であり「特に、哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動、およびその所産」とされている。文化人類学者である E. タイラーの文化に関する古典的定義では「文化あるいは文明とは、社会の成員としての人間によって習得された知識、信条、芸術、法、道徳、慣習や、他のいろいろな能力や習性を含む複雑な総体」とされている。これらを総括すれば、文化とは、「精神的活動から生み出された有形・無形の成果の総体」といえる。

大学応援団の活動を大まかに整理すると、動的な活動と静的な活動があるといえる。動的な活動は、本来の応援活動や演技披露などに関するものであり、身体面から生まれるものである。静的な活動は、動的な活動を行うために組織が培ってきた慣行や価値観に存在するものであり、精神面から生まれるものである。これらは応援団の長い歴史（伝統）の中で培われてきたもので、大学応援団は、所属し継承する応援団員の「精神的活動から生み出された有形・無形の成果の総体」を内包した組織といえる。

さらに文化庁によれば、文化のうち「演劇、音楽、工芸技術、その他の無形の文化的所産で我が国にとって歴史上または芸術上価値の高いもの」を「無形文化財」としており、「無形文化財は、人間の「わざ」そのものであり、具体的にはそのわざを体得した個人または個人の集団によって体現される。」としている。大学応援団は、身体面・精神面から生まれる我が国特有で価値の高い文化を保有しており、そのわざを体得した応援団員という個人の集団で体現されていることから、無形文化財といえる。今後は、大学応援団が自らの諸活動を無形文化財と自己認識するとともに、この文化を適切に後世に残すよう、今こそ自らの活動を見つめ直し、深化を進めるべきである。

なお、演技などの応援技術に加え、礼節なども含めた総体が大学応援団という文化を構成しており、かつそれらが応援に必要な心構えなどの精神を養っているが、これは、ある特定の技術を究める中で自己を高めることができると考える日本文化特有の姿勢と等しい。大学応援団は、大学生の限られた期間でしか経験することができないが、その中で得た経験と、それらから自得したスピリットなどは、己の礎となるとともに、生涯にわたっての財産となるものである。

10 今後の大学応援団のための提言について

これまで述べてきたように、大学応援団は明確な目的・意義を有しており、活動にまい進する中に多くの魅力を秘めた存在である。そして、大学応援団は総体として日本特有の無形文化を形成している。他方、大学応援団は応援対象や会場の観客を含む多くの第三者との関係が重要であり、文化の墨守はその劣化を招く恐れもある。今後、大学応援団はその活動において、引き続き自らの文化を継承していくとともに、例えば応援の専門組織として誰もが参加できる応援方法を作り出すなど、その文化を「生きた文化」としてさらに深化、多様化していくことが必要である。

それぞれの大学応援団が、それぞれの活動の中で大学応援団の文化を深め、かつ多様化していくことを提言し、本報告書の結びとする。

～研究会開催状況～

○第一回研究会

開催日：平成28年3月20日

議題：新入団員減少の原因について ほか

○第二回研究会

開催日：平成28年5月5日

議題：大学応援団の役割とは何か ほか

○第三回研究会

開催日：平成28年7月30日

議題：大学応援団の面白さ・楽しさについて ほか

○第四回研究会

開催日：平成28年10月22日

議題：応援団成立の歴史的経緯について ほか

○第五回研究会

開催日：平成28年12月10日

議題：大学応援団の世界観とその背景について ほか

○第六回研究会

開催日：平成29年2月11日

議題：応援団員の心持ち（精神）について ほか

大学応援団の在り方に関する研究会 報告書 2018

○第七回研究会

開催日：平成29年5月6日

議題：大学応援団の魅力と構成（案）について ほか

○第八回研究会

開催日：平成29年7月22日

議題：応援団員の心持ち（精神）について（再議論） ほか

○第九回研究会

開催日：平成29年9月9日

議題：大学応援団の文化について ほか

○第十回研究会

開催日：平成29年11月11日

議題：大学応援団と道について ほか

○第十一回研究会

開催日：平成30年1月20日

議題：研究会の成果発表について ほか

○第十二回研究会

開催日：平成30年2月17日

議題：報告書 2018 の完成について ほか